

「阪神」生かす街づくり

表題と写真は2015年1月5日の毎日新聞特集「一極社会 東京と地方7」の見出しである。東日本大震災の被災地宮城県石巻市で一昨年9月にあった、街づくりを話し合う座談会に、もう一つの大震災の被災者がいた。神戸市長田区で茶販売店を営む伊東正和さん(66)だ。伊東さんは新長田の大正筋商店街の振興組合理事長を務める。阪神大震災で、商店街は約100店あった加盟店のうち90店が全壊・全焼した。



伊東さんは自らの体験から意見を述べた。「古くからの商店街が集まっていた地域ということで、石巻と長田の状況は似

ている。復興でごっついコンクリートのビルを造る必要はない。皆で話し合い、石巻らしい古い街並みを残せば人は集まってくる。」伊東さんがそこまで言い切ったのには苦い思い出がある。震災から4年たった99年以降、神戸市による再開発事業で、低層の住宅や店舗が主に建ち並んでいた20層は、30階建てを含む「ビルの街」に生まれ変わった。伊東さんの店も03年、ビルの1階で再開した。上層階はマンションだ。しかし、客足は鈍り商店街は活気を失ってしまった。

「この商店街の良さは、にぎやかで庶民的なところだった。しかし、温かみのないコンクリートの街並みになってしまった。」買い物をつうじた人と人とのつながりが、新しい街では作りづらくなった。店舗の再開で必要だった3500万円の借金と、上昇した固定資産税負担、ビルの管理費などの経費も経営を圧迫する。商業用に設けられた2階はシャッター通りのままだ。

右の写真は2年ほど前に新長田に行ったときに撮ったものだ。伊東さんのお店については、テレビや新聞などで知った。お店の前には「鉄人と三国志の街 新長田」という案内とともに、数多くの関連グッズなどが並べられていた。



伊東さんは「震災で混乱していて、街づくりに参加することなどできなかった。気づいたときには計画は決まっていた。自分たちの街は自分たちで作るべきだった」と悔やむ。「東日本の被災地は復興に時間はかかっているけれど、その分、いろんな意見を聞いたり議論をしたりする時間がある。私たちの失敗に学んでくれているのならうれしい」と話す。

(2015年1月12日)